

会津のクロバシロチョウ？

会津地方は白虎隊で有名な会津若松市を含む福島県南部の新潟県よりに位置する地域を称してそう呼ばれているが、その地域の西端の只見町から北東につながる金山町～三島町～柳津町にかけ素晴らしい光沢の黒いウスバシロチョウが産するという。

その分布はキマダラルリツバメやギフチョウの産地と重なり、関越道の小出、東北道（磐越道）の会津坂下を結ぶR 252 号に並行した地帯である。

西端なら関越道、北東端なら磐越道が近い、今回は群馬の池沢氏も参加ということで関越道回りとなった、

6/5 麻生、仁平は3時半起きをして中央道石川SAより群馬藤岡を目指し6時ころ池沢氏の車に拾われ目的地を目指した。何せ氏の車はマニュアル車なので我々では心もとなく？群馬藤岡からの往復500キロを氏は一人で運転というはめになってしまった。

小出より会津にかけては名だたる豪雪地であり、R252 沿いのいたるところに残雪がみられた。

只見町の東端の塩沢というところに9時ころ着くと河井継之助記念館と墓という看板があった、そのようなものが好きな二人は写真撮りがてら歩いて行ったが、河井継之助の名さえ知らない私は車に残っていた。

帰ってきた麻生氏はここにもいたと言って手づかみで採ったウスバシロを持っていた。やや小型であるが何の変哲もないウスバシロであった（帰りにも寄って計5頭を得たがすべて普通の個体でした）

その後、寺さん御推奨の三島町の西端についたのは10時ころであった。本日は晴れ、曇り、雨が順めぐりで来ると、黒いものは私の1♂だけであった。すべての個体が小型で黒いといっても少しつやがあるかなと思うくらいで他の黒い産地とそう変わらないように見えました。この辺はまだ発生初期と思われたので金山町は通過し一番標高が低い柳津町へ向かいました。

折から晴れ間が多くなり窓からもウスバシロの飛翔が目立ってきたので、適当に止めよさそうな草地を目指すと多数のウスバシロが飛翔していましたが、斜面はほとんど立ち入り禁止で山菜採りを禁ずるようになっており意外と気を使いました。

黒いの黒いのと眼をさらしますがなかなか見つかりません。クロバシロはあまり飛ばず止まっているのが多いことと20～30位に1頭位の割合でしか見つかりません。しかしこの辺のウスバシロは黒化型でない普通の個体でも翅脈の黒が濃く外縁の薄墨の発達が素晴らしくメリハリのあるものなので、つつい手が出てしまいました。

その後、磐越道に一番近いあたりでかなりの多産地にぶつかりました。桐林と畑の混じる草地ですが晴れ間には活発に飛ぶものの、雨が降るとヒメジオンの花上に静止したままなので手づかみが可能となるので黒いものだけ狙って拾いました。

ともかくウスバシロは白～薄いピンクの花が好きで、ヒメジオン、ネギ坊主や名前不詳の白い花、フジの花等で吸密に夢中です。

皆それぞれ20頭位のクロバシロを採ったようですが、黒化のグレードの高いもの、完品となると一桁位でしょうか？

私の印象としては思ったほど黒いとも思えず、翅の薄さ、小型、つやがあるの方が強く感じました。

まあ、各シーズンを含めてこの辺は20回ほど来ていますが、やはり南部とはいえ東北は遠いと思いますね。関越回りですと一番北東の産地から東京まで有に7時間はかかります。

それでも一見の価値はあると思いますので、是非一度お訪ねください。

* 住所変更

栗山定 〒170-0012 豊島区上池袋4-16-17 モア・クレスト上池袋404 T.F: 03-5944-5624

その他は変更ありません。

* メアド変更

久保田瑛子 she. see. sea0603@gmail.com

* 12月の例会は12/21(火)です。宜しくお願い致します。

* 新聞紙上より



2010.5.31
読

人と虫めぐる文化学ぶ

■ 大昆虫博

虫の標本や資料などを一堂に集めた「大昆虫博」が6月22日、東京・両国の江戸東京博物館で開幕する。昆虫ファンや夏休みの親子連れが楽しめる展覧会だ。

会場は九つのゾーンに分かれ、壁面に膨大な標本が並ぶ「大昆虫ワールド」が最大の見どころとなる。90年の歴史を持つ名和昆虫博物館(岐阜市)に収蔵された貴重な標本類写真だ。

虫好きで知られる学者の養老孟司さん、奥本大三郎さん、池田清彦さんの部屋を再現したコーナーもあり、愛用の顕微鏡や虫捕り網などを披露。漫画家のやくみつるさんが自ら山手線の駅を歩いて調べた「東京の虫」や昆虫ロボットの展示、クイズラリーもあり、人と虫をめぐる文化を楽しみながら学べる。9月5日まで。



展示は「ムシ目線」で

やくみつる さん

「近ごろ『生物多様性』なんて言うけど、虫好きはとくに重要性を感じている。そりゃ、いろんな虫がうじゃうじゃいれば楽しいもの」と話

「連中(虫)はなにせ小さい。こちらが意識しなければ視界に入らない。だから『探す』という以前に、潜んでいそうと予感することが必要になる」と極意を語る。そして、そんな心遣いがあれば、「連中が存外しぶとく都会に生息していることもわかることも。自ら展示に一役買う大昆虫博。「『ムシ意識目線』からの展示を」と力を込める。

漫画家のやくみつるさん。根っからの虫好きだ。東京・世田谷で生まれ育ち、身近な虫の本も出した。

放課後。千葉県船橋市にある県立船橋芝山高校の生徒6人が、長靴を履き、校舎を出た。向かったのは、敷地北端にあり、住宅地と斜面林に挟まれた「芝山湿地」。約600平方メートルに600種を超える生物が生息するビオトープだ。

6人は、科学研究部の1、2年生。この日のお目当ては、絶滅の恐れのある野生生物を記載した県のレッドリストで最重要保護生物に指定されているニホンアカガエルの卵。

部長の陸芳樹さん(17)らは池の中にゼリー状の卵塊を見つけたら、網を使って採取。計測器で大きさを測り、デジタルカメラで撮影した。生息状況を把握するためだ。

湿地はかつて荒地地で、不法投棄が絶えなかった。当時の理科教師らが整備に乗り出したのは、1999年。ヨシを刈り、小川を引き、木道を設けるなど手を

変わる校舎

No.1235

教育ルネサンス



2010.3.25
読

里山再生 環境意識育つ

加えるうち、次第にかつての里山の生態がよみがえった。

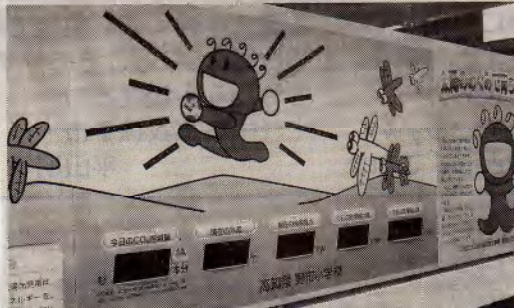
「ビオトープで素晴らしく世界が変わった」。生物担当の佐野郷美教諭(55)は感慨を込める。生物の「再生」を学ぶ授業では、生徒全員が芝山湿地で教材となるプラナリアを採取する。問題を抱える生徒を、保健教諭が湿地に連れ出し、自然の中で語らうこともある。教師の間からは「生

徒の落ち着きや素直さはビオトープが影響しているのでは」という声も上がる。

芝山湿地では、ハイケボタルが復活した。毎年7月の「ホタル鑑賞の夕べ」は、生徒から「家族や友達を呼びたい」という声が出るほどの人気。昨夏には学校のそばにある高齢者施設に同部3年の戸谷博明さん(18)が芝山湿地の環境を凝縮した水槽を持ち込み、

2日間にわたる鑑賞会を成功させた。

近くの小学校では、ビオトープに芝山湿地にいるホタルの幼虫が放される予定で、地域ぐるみでホタルの里を目指す計画が進む。戸谷さんは入学当時、介護職志望だったが、「大学でもホタルや絶滅危惧種に適した環境について学びたい」と、生物科学系学科への進学を決めた。



①芝山湿地で採取したニホンアカガエルの卵を記録する生徒ら(2月3日、千葉県船橋市の船橋芝山高) ②二酸化炭素削減量などを示すパネル(同6日、高知県香南市の野市小で)

高知県香南市の市立野市小学校の場合、校舎そのものが環境を学ぶフィールドだ。2005〜08年度に改修を行い、360枚の太陽光発電パネルや風力発電機を設置。校内を巡るエコツアーで発電の仕組みを学んだり、校舎を覆うように琉球アサガオなどを植えて「緑のカバー」を作り、二酸化炭素吸収量を計算したりした。

田中紀子校長(54)は「子どもたちから『校長室の電気がつけっぱなし』とチェックが入ることもある。エコが普段の生活に根づいていくことが大事」と話す。休日に学校に来て自主的に敷地内のゴミを拾って歩く児童もいるという。同小のように環境を考慮した校舎は「エコスクール」と呼ばれ、文部科学省によると、全国の公立幼稚園と小中高校で、09年8月末現在で951校に上る。

身近にある自然が子どもたちに環境意識を植え付ける。

(藤原健作、写真も)



ジャビット君みたい!!

アカハネナガウンカ

【体長】約4ミリ弱
【国内の分布】本州・四国・九州

この写真を撮った後、家でパソコンに取り込み、画面に大きく伸ばしたら、なんと、この虫が寄り目なのを発見、正直、ほんとうに驚いた。

デジカメの小さい画像モニターでは、このへんは判別できない。肉眼でこの虫をみても、せいぜい眼の位置が分かる程度の小さな虫なのである。

この虫は、ウンカ・ヨコバイの仲間、体全体が赤く、羽が長いという特徴そのまま、名前になった。ススキの葉などに多く見られ、植物に口を刺して汁を吸う。

この寄り目の黒い部分は、偽瞳孔とよばれ、人間などの瞳孔

2010.4.1 鏡記(9)



とは、構造的にまったく違うのである。偽瞳孔は、見る方向に応じて動いて見えるのである。横から見た写真では真ん中に来ている。

この写真は、一眼レフのデジカメに、5倍まで拡大できるレンズをつけ、超接写で昆虫たちを撮り始めた、最初の頃に撮った写真である。この写真がきっかけで、すっかり、虫の顔の魅力の虜になってしまった。

(昆虫写真家・伊藤年一)